王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅴ～

2011

例　　言

1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。調査地は以下の通りである。

・岩屋山古墳　　奈良県高市郡明日香村大字越小字岩屋山516-2番地他

・真弓ワダ古墳　　奈良県高市郡明日香村大字真弓小字ワダ750番地他

2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)

相原嘉之、猪熊兼勝、河上邦彦、小嶌康之、辰巳月美、長谷川透、松本俊春、米田文孝

3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と奈良国立文化財研究所発行の「地の窪」「真弓」(1：1000)、明日香村都市計画図（1：2500）を使用した。

4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたり、文責は各文末に示した。

5、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。

6、本書の編集は西光慎治が担当した。

目　　次

例言　目次……(30)

第１章　調査に至る経緯と目的……西光慎治　(31)

第２章　飛鳥地域の測量調査……(32)

第１節　地理的・歴史的環境……西光慎治　(32)

第２節　岩屋山古墳測量調査報告……辰巳俊輔・西光慎治　(36)

１、はじめに……(36)

２、測量調査報告……(42)

第３節　真弓ワダ古墳踏査報告……西光慎治　(45)

１、はじめに……(45)

２、踏査報告……(45)

第３章　総括……西光慎治　(47)

挿図目次

第１図：明日香村周辺地質図

第２図：飛鳥地域周辺遺跡分布図（1:25000）

第３図：岩屋山古墳位置図（1:1000）

第４図：岩屋山古墳周辺地籍図

第５図：岩屋山古墳位置図（明治年間）

第６図：『聖跡圖志』(嘉永７(1854)年)

第７図：岩屋山古墳（『高市郡志料』）

第８図：岩屋山古墳墳丘測量図

第９図：真弓ワダ古墳位置図（1:2000）

第10図：真弓ワダ古墳周辺地籍図（1:1000）

第１章　調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県立橿原考古学研究所や関西大学文学部考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。

調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成22年１月～平成23年1月にかけてのべ20日間行った。

（西光慎治）

【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

	岩屋山古墳	真弓ワダ古墳
担当者	西光慎治	西光慎治
調査員	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）

【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓鑵子塚古墳、マルコ山古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

第２章　飛鳥地域の測量調査

第１節　地理的・歴史的環境

【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曽我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曽我川に流れ込んでいる。

（西光慎治）

第１図　明日香村周辺地質図

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

明日香村では飛鳥川や高取川流域を中心として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した桧前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アリイ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。

〈古墳時代〉

古墳時代ではまとまった遺跡は確認されていないが坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橘遺跡や川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡等でも竪穴住居や韓式系土器、滑石製玉類や土坑等が検出されている。高取川流域では御園アリイ遺跡や桧前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。更に飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約60mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曽我川の支流、前川の上流部では6世紀中頃に造営された真弓鑵子塚古墳がある。真弓鑵子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山(標高210m)の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ1号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接してある観覚寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

1.岩屋山古墳　2.真弓ワダ古墳　3.小谷古墳　4.益田岩船　5.沼山古墳　6.牽牛子塚古墳　7.越塚御門古墳　8.真弓鑵子塚古墳　9.与楽古墳群
10.スズミ１号墳　11.スズミ２号墳　12.カヅマヤマ古墳　13.マルコ山古墳　14.真弓テラノマエ古墳　15.佐田遺跡群　16.束明神古墳
17.佐田２号墳　18.佐田１号墳　19.出口山古墳　20.森カシタニ遺跡　21.森カシタニ塚古墳　22.向山１号墳　23.薩摩遺跡　24.松山呑谷古墳
25.清水谷遺跡　26.ホラント遺跡　27.阿部山遺跡群　28.稲村山古墳　29.観覚寺遺跡　30.キトラ古墳　31.阿部山廃寺　32.呉原寺跡
33.桧前門田遺跡　34.檜前遺跡群　35.檜隈寺跡　36.坂ノ山古墳群　37.桧前上山遺跡　38.御園チシヤイ遺跡・御園アリイ遺跡　39.塚穴古墳
40.高松塚古墳　41.火振山古墳　42.中尾山古墳　43.平田キタガワ遺跡　44.梅山古墳　45.カナヅカ古墳　46.鬼の俎・雪隠古墳
47.野口王墓古墳　48.川原下ノ茶屋遺跡　49.亀石　50.西橘遺跡　51.定林寺跡　52.菖蒲池古墳　53.五条野宮ヶ原１・２号墳　54.五条野向イ古墳
55.五条野城脇古墳　56.五条野内垣内古墳　57.植山古墳　58.五条野丸山古墳　59.軽寺跡　60.石川精舎　61.橿原遺跡　62.田中廃寺
63.和田廃寺　64.雷丘北方遺跡　65.大官大寺跡　66.カセヤ塚古墳　67.庚申塚古墳　68.山田寺跡　69.上の井手遺跡　70.奥山リウゲ遺跡
71.奥山久米寺跡　72.雷丘東方遺跡　73.雷丘　74.豊浦寺跡　75.石神遺跡　76.飛鳥水落遺跡　77.飛鳥寺跡　78.飛鳥東垣内遺跡　79.竹田遺跡
80.小原宮ノウシロ遺跡　81.八釣・東山古墳群　82.東山マキド遺跡　83.金鳥塚古墳　84.飛鳥池工房遺跡　85.酒船石遺跡　86.飛鳥京跡
87.飛鳥京跡苑池遺構　88.甘樫丘東麓遺跡　89.川原寺裏山遺跡　90.川原寺跡　91.橘寺跡　92.東橘遺跡　93.島庄遺跡　94.石舞台１～４号墳
95.石舞台古墳　96.馬場頭古墳群　97.打上古墳　98.都塚古墳　99.戎成組田古墳　100.坂田寺跡　101.飛鳥稲淵宮殿跡　102.塚本古墳
103.朝風廃寺　104.稲淵ムカンダ遺跡

第２図　飛鳥地域周辺遺跡分布図（1：25000）

〈飛鳥時代〉

７世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓から越智丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳、石英閃緑岩の刳り貫き式横口式石槨を有した越塚御門古墳などが存在している。更に南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた束明神古墳、骨蔵器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳が点在している。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓が東西に並んで築かれており、南方には八角形墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。更に高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百済大寺(吉備池廃寺)が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。天皇家の寺院としては斉明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど、二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の上流に約１㎞にわたって続いており、上流部には飛鳥池遺跡が存在する。飛鳥池遺跡は７～８世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、７世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橘遺跡では７世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等の寺院が建立され、周辺部には７世紀代の大壁状遺構や掘立柱建物群が検出された檜前遺跡群などがある。

〈奈良時代以降〉

西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では11～13世紀代にかけての白磁椀を使用した火葬墓や一辺約４mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁椀等が出土している。中世以降になると南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観覚寺城が築かれるようになる。近世になると西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。　（西光慎治）

第２節　岩屋山古墳測量調査報告

１、はじめに

岩屋山古墳は奈良県高市郡明日香村大字越小字岩屋516-2番地に所在する終末期古墳である。岩屋山古墳についてはその精美な石室を有する古墳として有名な飛鳥の終末期古墳の一つである。江戸時代の1854（嘉永７）年に刊行された『聖跡圖志』の中に「岩屋　真弓岡陵　皇極祖母ノ陵カ」とあり、石室が開口している様子が描かれている。1893（明治23）年に著された野淵龍潜の『大和國古墳墓取調書』の中で「高市郡阪合村大字越ニ在リ字岩山ト云フ其塚壮大ニシテ一見尋常ナラザルヲ知ル南方ニ石窟ノ口廣ク開ケリ羨道三十尺玄室十五尺餘アリ其構造ヤ宏壮堅牢ニシテ四壁皆切石ヲ甃タリ村人ノ傳唱ニ因レバ武内宿弥ノ子韓宿弥ノ殯葬ノ處ニシテ後葛上郡葛村大字稲宿へ改葬セシモ尚其霊ヲ祀リテ村社トナセリ今ノ許勢津神社是ナリ韓宿弥ハ武内ノ五男ナル故此社ヲ五郎神社トモ称ス村名ノ越ハ巨勢ノ訛傳ニシテ往古ノ書類ニハ巨勢ト記セリ云々依テ武内ノ傳ニ考フルニ七子アリ即チ羽田矢代宿弥巨勢小柄宿弥蘇我石川宿弥平群木兎宿弥木角宿弥葛城長江襲津彦若子宿弥ナリ而シテ謂フ所ノ韓宿弥ハ即チ許勢小柄宿弥ニシテ古事記ノ順序ニ依レハ二男ノ如シト雖ドモ三代実録巻五ノ文ニ田レバ第五男巨勢男韓宿弥ト書セリ又伴信友ノ神名帳考証ニハ此村社ノ祭神ヲ許勢小柄宿弥トセリ又タ順ノ和名抄ニハ高市郡巨勢トアリ此等ヲ以テ考フレハ村民ノ傳唱モ亦故ナキニアラス依テ本塚ハ男韓宿弥ノ殯處ト考フ　此人ノ官職ヲ詳シテ能ハサルヲ以テ其構造ノ當否ヲ甄別スルニ由ナシ」と記されており、石室の計測や伝承、被葬者についても言及している。1897（明治30）年にはウイリアム・ゴーランドの「The Dolmens and Burial Mounds in Japan **日本のドルメンと埋葬墳**」の中で、岩屋山古墳について次のように紹介されている。「もっともすばらしい、驚嘆するような切り出し石の巨石構造の例は、舌を巻くほど見事な仕上げと、石を完璧に組みあわせてある点で日本中のどれ一つとして及ばない越にあるドルメンで、これは今述べた所(小谷古墳)から南東へ一マイルほどの場所にある。そのドルメンは二段丘の円墳内にあるが、その一方の側面は村の宅地用にずいぶんと削りとられ、他の側は畑に占拠されている。元来の墳丘は直径一六〇フィート以下ではなかった。その高さは三六フィート。ドルメンには上の段丘から入れるが、その上段丘はドルメンの床と同じ高さにある。全長は内部が四四フィートだが、羨道はそれよりもさらに天井なしで七フィート延びている。室は一五フィート、幅八フィート一〇インチ、高さ八フィート一〇インチ、羨道は長さ三六フィート七インチ、幅六フィート五インチ、室の入口では高さ五フィート六インチである。室から一七フィート一〇インチ離れた所に、八インチのステップが羨道の天井にあって、これは粗雑な石のドルメンでも見られるもので、そのステップには室に近づけないよう一種の防御法が施してあるが、それでも儀式を行う必要上、羨道の外部に内側に入れるだけの十分な空間を残している。花崗岩の石は、ドルメンの内部では実にきれいに切って磨いてあるが、外側は通例のように自然のままである。室の天井も同じように切った巨大な塊石一つでできていて、長さ一四フィート六インチ、幅一一フィート六インチある。このドルメンはいかなる民間伝承も、またいかなる皇族や豪族の名も付いていない。村人の話では、このドルメンにはかつて石棺があったが土器もその他の副葬品も出土したとは聞いていないそうである。それは現在、ある農夫の穀物倉になっていて、ときどき掃除したために、ずいぶんと綿密で入念な調査をしたけれども年代がわかる手掛かりは何一つなかった。その、見事に仕上げた石工技術は、ドルメン時代初期をはるかに経てからの築造であることを示している。なぜなら、初期時代の粗雑なドルメンからこれほどの完璧な構造になるには数世紀が必要だったに違いなく、だから、これはドルメンの築造が最盛期

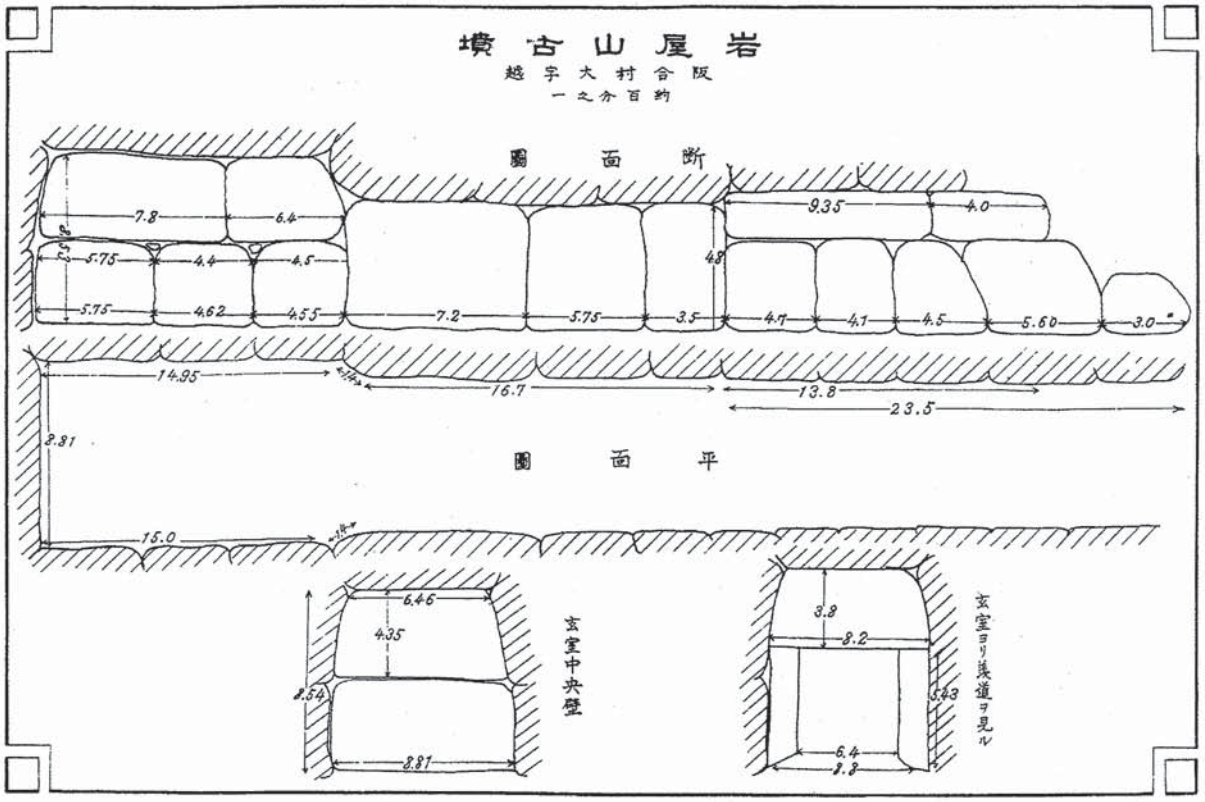
第３図　岩屋山古墳位置図（1：1000）

第４図　岩屋山古墳周辺地籍図

に達したころからあまり隔たってはいないと思える。」とあり、ゴーランドが本格的に岩屋山古墳を調査した最初の研究者であったことがわかる。1913（大正２）年には佐藤小吉の『**奈良縣史蹟調査會報告書第一回**』が刊行され「所在　高市郡坂合村大字越字岩屋山ニアリ、方向正南ヨリ稍東ニ傾キ、同村ノ舊家ニシテ、現ニ區長ナル松本文三郎氏ノ所有ニ係ル。構造　四壁、孰モ立派ナル花崗岩ノ切石ヲ以テ甃ミ、其ノ規模ノ宏壮ナル、彼ノ磯城郡安部村安部文殊堂ノ奥院ノ古墳ニ匹敵セル好一對ナルヘシ。別紙ニ示セル如ク、羨道ノ長サ約二丈八尺五寸、幅七八尺ニテ、天井ハ五枚ノ石ヨリナリ、玄室ノ長一丈五尺、幅八尺八寸餘、高八尺五寸餘、天井ハ一枚石ヲ用ヒタリ。但石棺ヲ見ス。傳説　世ニ此ノ墳ヲ以テ、巨勢小柄ノモノトス。今此ノ墳ニ近ク五郎宮アリ、傳ヘ云フ、其ノ祭リ神ハ、即チ巨勢ノ小柄ニシテ、武内宿弥ノ五男ナルヲ以シカ云エヘルナリ、小柄ノ曾孫男人ニ至ルマテ、此ノ地ヲ領セシヲ、男人功ヲ以テ地ヲ葛城ニ賜リ、其ノ地ヲ後ニ古瀬村ト云ヒ、小柄ヲモ彼ノ地ニ改メ葬リヌ。即チ今ノ葛上郡稲宿村新宮山ニシテ、其ノ古墳ハ、即チ此ノ岩屋山ナリト。（五郎宮碑文ニ據ル）延喜式ヲ案スルニ、式内許世都比古命神社アリ、名所圖繪ニ、越村ニアリトシ、今五老神ト称ストアルハ、此ノ五郎宮ナルヘク、伴信友モ、其ノ著神名帳考證ニ、巨勢氏ノ祖神トセリ、又此ノ社ヲ指セルモノナルヘシ、今併セ記シテ、後日ノ資料ニ供ス。」と記されている。1915（大正４）年には『**高市郡志料**』が刊行され、その中で「越の岩屋山古墳は阪合村大字越字岩屋山に在り、中街道豊年橋を西に渡り、約二丁許、村落の入口人家の北方に在りて、高凡二間根廻三十八間許の獨立古墳なり。古來大字區長松本某の私有に属し雑木林となれり。塚口は南に向ひて開けたり。大和志は皇極天皇皇祖母陵に擬し益田池碑文の大墓聳南即此と記し聖跡圖志も亦之を書き皇祖母陵にあらさるかと云へり。志而して皇祖吉備姫王の御墓は今阪合村大字平田なる欽明天皇檜隈阪合陵の傍にあり。石槨は玄室と羨道との二部より成り、玄室は奥行凡一丈五尺幅凡八尺八寸高凡八尺五寸天井は一枚石なり。但し上部は漸次内方に縮まるを以て天井石の面積も亦縮まるものの如く側壁左右各下三枚上二枚奥壁上下各一枚積み重ねたり。羨道は長さ二丈三尺五寸幅入口に於て七尺、玄室に接する所に於いて六尺四寸、高五尺五寸、天井は五箇の巨石を用ひ二段となりて其の差六寸あり、側壁も亦五箇の大石を列ね尚ほ孔外に各一箇を配置せり。何れも花崗岩質片麻岩にして、磨礱精巧なる巨石を用ひ、構造の精巧なること他に多く類を見さる所なりとす。窟外木牌を掲けて巨勢小柄宿弥の墓たるの傳説を記せり、されと據る所なし。蓋し當古墳は皇祖母吉備姫王真弓墓にして延喜式にある檜隈墓はその後改葬せしもの歟。」と記されている。1923（大正12）年に刊行された『**高市郡古墳誌**』には「中街道豊年橋を西に渡って約二町許、村落の入口人家の北方にあって、高さ凡そ五間、長径十四間、短径九間、面積約三畝七歩許の獨立古墳である。古來大字區長松本善三郎の私有に属し雑木林となって居る。羨道は南に開けて低い丘陵にある圓墳である。現今南東北の三方は雑木林で稍々自然の状態を存して居るが、西方は削りとられて絶壁をなし、羨道部の所は殆ど石材の所まで人家に接して居る。玄室及び羨道は完全に現存して居る。羨道の入口が廣濶であるから玄室内まで光線の射入十分であって、槨内の現状を窺知する事容易なるは稀に見る所であらう。石槨は玄室と羨道との二部から成り玄室は奥行凡そ一丈四尺五寸、幅八尺八寸、高さは八尺九寸、天井は一枚石である。但し上部は漸次内方に縮小して居るから、天井石の面積も亦縮まって居るが、側壁左右各下段三枚上段二枚奥壁各一枚積重ねてある。羨道部は長さ二丈三尺二寸、幅入口に於て六尺四寸、玄室に接する所に於て五尺四寸、両壁は各九枚の巨石を用ひ天井は五枚の巨石にして二段となり其差六寸ある。羨道部天井石最前端のものに、横に一線の溝が穿ってある。蓋し羨門部の密閉装置がしてあったものと思はれる。尚孔外に各一個の石を配置されてある。何れ

第５図　岩屋山古墳位置図（明治年間）

第６図　聖跡圖誌（嘉永７(1854)年）



第７図　岩屋山古墳（『高市郡志料』）

も花崗岩質片麻岩であって磨礱精巧なる巨石を用ひ、構造の精巧なることは他に多く、類を見ざる所である。此の古墳についての傳説は二つあって一つは皇極天皇御母吉備姫王檀丘墓に擬し他は巨勢雄柄宿弥墓と傳へて居る。若し前者とすると式に檜隈墓とあるから後世改葬したものであろう。」と記されている。1935（昭和10）年には日本古文化研究所から『**近畿地方古墳墓の調査一**』が刊行され、その中で「此の古墳は大和國高市郡阪合村大字越小字岩屋山の第五一六番地にあつて、其の字名から古く石室の開口していたことを示すものである。墳の主體である處の石室が切石から成る壮麗なものである点で、早くから世人の注意に上つて、同國磯城郡阿部文殊院西古墳のそれと並び称せられ、従つて関係の記述も少なくない。是等の中でガウランド教授の「日本に於ける石室と高塚」なる論文に載った墳形の實側圖と其の記述とは最も早くて而も正確なものとする。佐藤小吉氏が大正二年に『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第一冊に発表した「岩屋山古墳」なる報告は主として石室に就いて書いたもので、これは其の後の『奈良縣高市郡志料』『奈良縣高市郡古墳誌』等の據る所となつた重要な文献であるが、今日から見れば、種々の点に不備があり、改めて正確なる記載をなすの要を認める。これが吾々の本古墳を新たに調査するに至った所以である。位置と外形　岩屋山古墳は越の部落の東北隅に近接して、大軌吉野線の橘寺前停留所の西北約一町にある。其の地は飛鳥平野の南に起伏する山丘地帯のうち、西から延びて檜前川の流れに沿ふた谷に終る一の臺地の端に當つて居り、北方が開けて三山を眺むべく、南方また前記の川の上流に對して一の景勝をなしている。『高市郡古墳誌』に依ると、塚の面積は約三畝七歩あつて、古くから越の區長松本善三郎氏の所有地として保存されているとあるが吾々の調査の際、近年それが高市村長脇本熊次郎氏の有に帰したと言うことを聞いた。さて現在櫟の密生した此の塚の外形は、東半の部分は極めてよく遺存しているが、西半は何時の世にか破壊せられて畑地と化し、一隅に人家が建ち等して、封土が崖状になつて形態を損することが著しい。而して此の南北に崖状をした現存封土の西側に接して南向の石室が開口している。右の現存封土は圖版第四の吾々の實測図に見る如く、東・北・南の三方で高さ十尺内外を測る第一段の上に高い第二段たる主丘を築いたものであつて、第二段の下邊は比較的急な傾斜を呈していることが知られる。此の封土は南北の長さが基底部で約百三十尺、上段の主丘の下部で七十五六尺の間にあり、高さは通じて三十尺に近い。東西の方は封土の西半が削られた為に前者と違っているが、破壊せられた部分を復元すると第四圖の如くなつて、略同じ大きさが出て来るから、本来二段築成の整美な丸塚であつて、規模もまた相當大きいことが認められるのである。右の封土の表面は雑草に覆はれて詳細に調べることは出来なかったが、時に小石を見る外、特に石を葺いた様な形跡がなく、又埴輪圓筒片も見當らず、断面を表はした西半の部分でも一切両者のあつた風がなかつた。従って本来特別の外部的な設備を加へなかつたと見るべきであろう。石室の構造大形で完好な二段築成の圓墳であると言ふ以外、特に著しい特異点とてはない外形に對して、本遺跡を特色附ける處の石室は前段既に説き及んだ如く、現存封土の西邊に偏して南側に戸口を開いて遺存するものである。但し右の偏在は封土の西半が削り取られた結果であつて、本来は封土の中央の南面に位置していたに相違なく、實際玄室は略ぼ現存封土の頂部下にあり、前の長い羨道を経て、天井石の端が主丘の下邊に来る様になつていること實測圖に見る如く、其処に封土と内部主体主體との正しい関係が表はれている。此の石室が花崗岩の巨大な切石を用ひて築成せられた整美な式であることは、ここに更めて繰返すまでもないが、平面形の示すところ、玄室は長十五尺餘幅九尺に近く、両者の比が五對三と言ふ如何にも頃合ひな矩形をして居り、其の前に両側で各一尺二三寸宛幅を狭めた羨道があり、これは長さ四十尺に達する長大なもので、戸口に至るに従って漸次

幅が廣くなつてある。次に右の平面形の側壁は通じて加工の度の高い滑かな面をした巨石を以て架構、而も左右均整になつている点が先づ注意せらる。即ち玄室にあつては高さ八尺五寸内外の壁面が二段から成り、下邊は左右壁各三枚、奥壁一枚を並列し、其の上に左右各二枚、奥一枚の巨石を積み重ねたもので、後者は前者よりも上邊がより斜に前に出ていて、これが羨道との界をなす天井石の側面の同じ加工と併せて、玄室の内部を恰も家屋の内側に似たものとしているし、更に是等の用材並に同部を覆ふた一枚の巨大な天井石は通じて面が直でなく、緩かな内反りの曲線を示す様に加工せられてあつて、其の上に軟味を持たせているのは特記すべき点としよう。羨道は玄室につづく部分約十七尺は左右共に高さ六尺内外の一枚石の並列で、天井石と共に各三枚から成るが、それから外は天井部が少しく高くなつて、幅の開きと對応して居り、側石は一部分二段積みの処があつて、若干の変化を示している。而も用材の稍々不揃である同部から、天井石のない先端に至るまで、すべて左右均勢である点はよく設計者の入念さを物語るものと言ふ可く、また如上の細部を通じて羨道の除々に奥へ狭まつて行く所に本石室の死者の永久の奥城たる神秘的な趣を加へるものがある。右の架構と関連して、現在玄室をはじめ羨道の一部の石材の合せ目にセメント様の接合材を施したことが注意せらるが、これは手法、其他から観て開口後保存上加へたものとするに殆んど疑問はない。以上石室の構造に次いで、なほ注意を惹く点は、其の羨道の戸口の示す細部の状態とする。既に挙げた如く、此の部分では羨道の側石は現存天井石の端からなほ十尺以上もつづいていて、率然として對すると右の部分を覆ふた天井石が失はれた様にも思はれるが、現在の先端の天井石を見ると、正面を通じて、下部に幅五寸の面取りが施されているのみならず、それから上面が斜めに恰も屋根の一部をなす様に加工した形跡が極めて顕著であり、本来外方に露はれたことを察せしめるものがある。かかる加工は他と土中で接合する場合に不必要であることは言ふまでもないから、同石材は自ら天井石として普通のものと違った意味を持ったものと解す可きで、其の前方にもとの他の天井石があったとはなし難い。而して此の場合右の石の上面の傾斜がそれにつづく封土の「スロープ」に合致していることと、他方石の下面に於いて端から七八寸の処に幅二寸、深さ七八分の一直線の切込みのあることとは、進んで同石が本来の戸口の楣石に當り、それから少し入った所に扉を加へたとする推測を加へしめるに役立つものとする。ここで、左右の側石が右の天井石から前へ漸次高さを減じて、略ぼ封土の流れと一致している点も、また前者と結びつけて理解せられることになるであらう。果たして然らば本石室の戸口は営造あの當初から封土中に埋没せしめず、外側に露はす様に設計したものと見る可きで従来不問に附された横穴式石室の営造に関する一の事實が新しく考へられ、それが同時に葬送の事實と連関して別個の考察を導くことにもなって来る。本古墳に就いては其の被葬者就いて二つの傳をきくものであるが、固より確實なる據所などなく、石室の開口が古くて異物の有無など尋ぬべくもない。併し壮麗なる其の石室が幸に保存せられ、戸口に於いて如上の学術上興味ある細部を遺存するのは稀有の例とす可く、此の点から吾々は本墳の将来の保存に就いて當局の考慮を望むものである。」と記されている。1967（昭和42）年には白石太一郎の「**岩屋山古墳の横穴式石室について**」の中で、岩屋山古墳の石室を指標とするタイプを「岩屋山式」と設定して、同じ規格に基づいて設計された古墳としてムネサカ１号墳(桜井市)をあげ、高麗尺による規格を検討されている。1973（昭和48）年には菅谷文則・河上邦彦による「**岩屋山古墳測量調査報告**」が発表され、岩屋山古墳の詳細な実測図が提示されると共に、一辺約54mの三段築成の方墳である可能性が示されている。1976（昭和51）年には猪熊兼勝「**飛鳥時代墓室の系譜**」では岩屋山古墳を「切石積み横穴式石室」のタイプとし、羨道天井石先端の溝について板状の扉石で閉塞

するこれまでの閉塞法とは異なる新技法を採用しているとされた。1978（昭和53年）には網干善教らによって史跡環境整備事業の一環として発掘調査が実施され、墳丘は一辺約40m、高さ約12mの二段築成で、埋葬施設は全長約18mの両袖式横穴式石室でることや、床面には幅約55cm、深さ約30～40cmの溝内に礫を充填した暗渠排水溝が検出されている。出土遺物から石室は中世以前には開口しており、また二次利用が行われていたことも明らかとなっている。その後、調査成果を受けて環境整備事業が実施され、階段や解説板などが設置されている。1968（昭和43）年５月11日には国史跡に指定され、現在に至っている。（西光慎治）

２、測量調査報告

岩屋山古墳は高取川左岸の南北に伸びる低位丘陵から東へ派生する三条の尾根の中央に位置している。墳丘は東側で標高98.500～99.250m付近にかけて、幅約３mのテラス面が明瞭に残存することから、二段築成の墳丘であることがわかる。墳丘は埋葬施設を境にして西側半分は大きく削平されており、詳細は不明である。高さについては墳丘の基底部と考えられる標高94.000mから墳頂の標高105.000mまでで11mとなる。墳丘北側の上段裾部の標高101.000mから墳頂までの比高差は４mとなり、南側の上段裾の標高98.500mから墳頂まで6.5mを測る。これによりやや北側が高くなっていることがわかる。下段の高さは墳丘基底部からテラス面の標高98.000mまでで４mとなる。北側はコンクリート壁となっているため、詳細については不明である。墳形については墳丘北東側の標高97.250mから98.500mと南東側の標高97.000から97.750mでコーナー部分が認められる。上段についても北東と南東で同様のコーナーを確認することができる。これらを総合すると下段の一辺が約40m、上段の一辺が約18mとなり、高さ約11mの二段築成の方墳に復元することができる。また上段裾部の標高98.500mから100.000m付近にかけて屈曲したラインが４ヶ所確認することができる。これらから墳丘上段は対角長約25mの多角形（八角形）を呈していた可能性も考えられる。その場合、下段は一辺約40mの方形で上段が多角形に復元することができる。（辰巳俊輔）

【引用・参考文献】

ウイリアム・ゴーランド1877「日本のドルメンと埋葬墳」上田宏範編1981『日本古墳文化論』所収　創元社

野淵龍潜1893　『大和國古墳墓取調書』

佐藤小吉1913　「岩屋山古墳」『奈良縣史蹟勝地調査会報告書』第一回　奈良縣

高市郡役所1914　『高市郡志料』

高市郡役所編1925『高市郡古墳誌』

日本古文化研究所1935「大和越岩屋山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』１

白石太一郎1967　「岩屋山古墳の横穴式石室について」『ヒストリア』第49号　大阪歴史学会

菅谷文則・河上邦彦1973「岩屋山古墳の墳丘測量調査」『青陵』第22号　橿原考古学研究所附属博物館

猪熊兼勝1976　「飛鳥時代墓室の系譜」『奈良国立文化財研究所学報』第28冊　奈良国立文化財研究所

網干善教他1980　『岩屋山古墳－史跡環境整備事業に伴う事前調査概要－』明日香村

第８図　岩屋山古墳　墳丘測量図

第３節　真弓ワダ古墳踏査報告

１、はじめに

真弓ワダ古墳[1)]は奈良県高市郡明日香村大字真弓570他に所在する。周辺には穹窿状横穴式石室の真弓鑵子塚古墳や与楽カンジョ古墳、ミニチュア炊飯具などが出土した与楽古墳群、そして磚積石室墳のカヅマヤマ古墳や横口式石槨のマルコ山古墳など多くの後・終末期古墳が点在している。同じ丘陵の西端にあるスズミ１号墳は右片袖式の横穴式石室で、ミニチュア炊飯具や鉄釘などが出土している。またスズミ２号墳の棺内からは耳環と鉄釘、そして20歳前半代と考えられる女性の歯牙が出土している。

今回の踏査は王陵の地域史研究の一環として、真弓地域を中心に実施したもので、その中で終末期古墳の特徴を備えたと考えられる地形が存在したことから、報告することとする。
踏査は2010（平成22）年1～3月にかけて休日を利用して行った。

２、踏査報告

真弓ワダ古墳は東西に伸びる丘陵の南側斜面に位置している。現状では墳丘状の高まりは存在しておらず、詳細については不明である。しかし、丘陵南側斜面には終末期古墳特有の墳丘後背面の切断面が確認できる。この切断面の規模は幅約90m、高さ約10mを測る。コの字形に囲まれた範囲内は現在、雑木や竹が茂り、一部畑地となっている。その中で一辺約５m四方の範囲に竹が密集しているところがある。特に隆起等は認められないものの、コノ字形に囲まれたほぼ中央に位置することから、墳丘が存在していた場所であった可能性が考えられる。現地では古墳に伴うような遺物は表採していない。

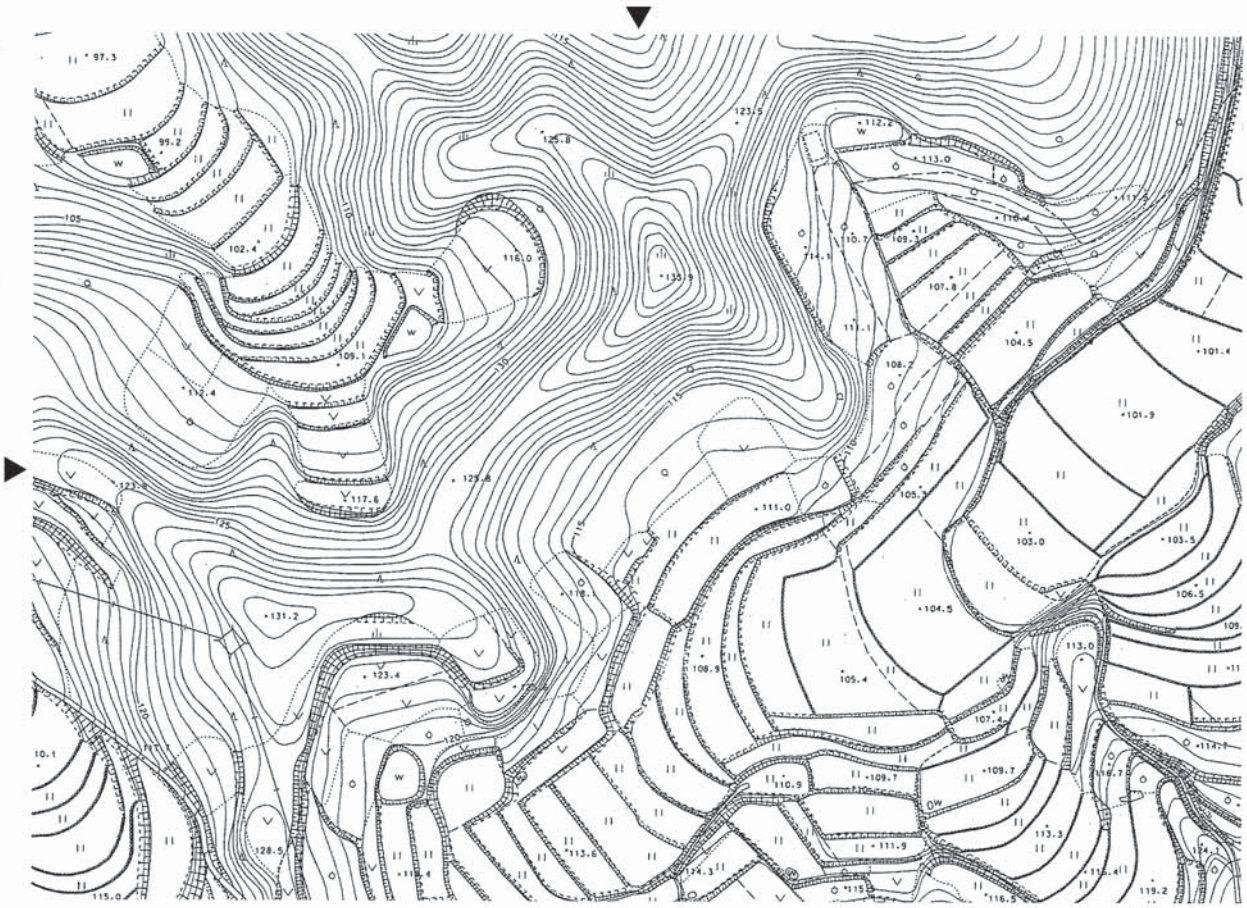
今回、報告した真弓ワダ古墳については古墳が立地する地域が、渡来系要素を含む遺物が出土する古墳が密集する地域でもあり、慎重を期したいが真弓ワダ古墳のすぐ南側に位置する丘陵の南側斜面にはカヅマヤマ古墳やマルコ山古墳などの終末期古墳が存在することから、ここではあえて終末期古墳の可能性を指摘するにとどめ、今後に期したい。　（西光慎治）

【註】

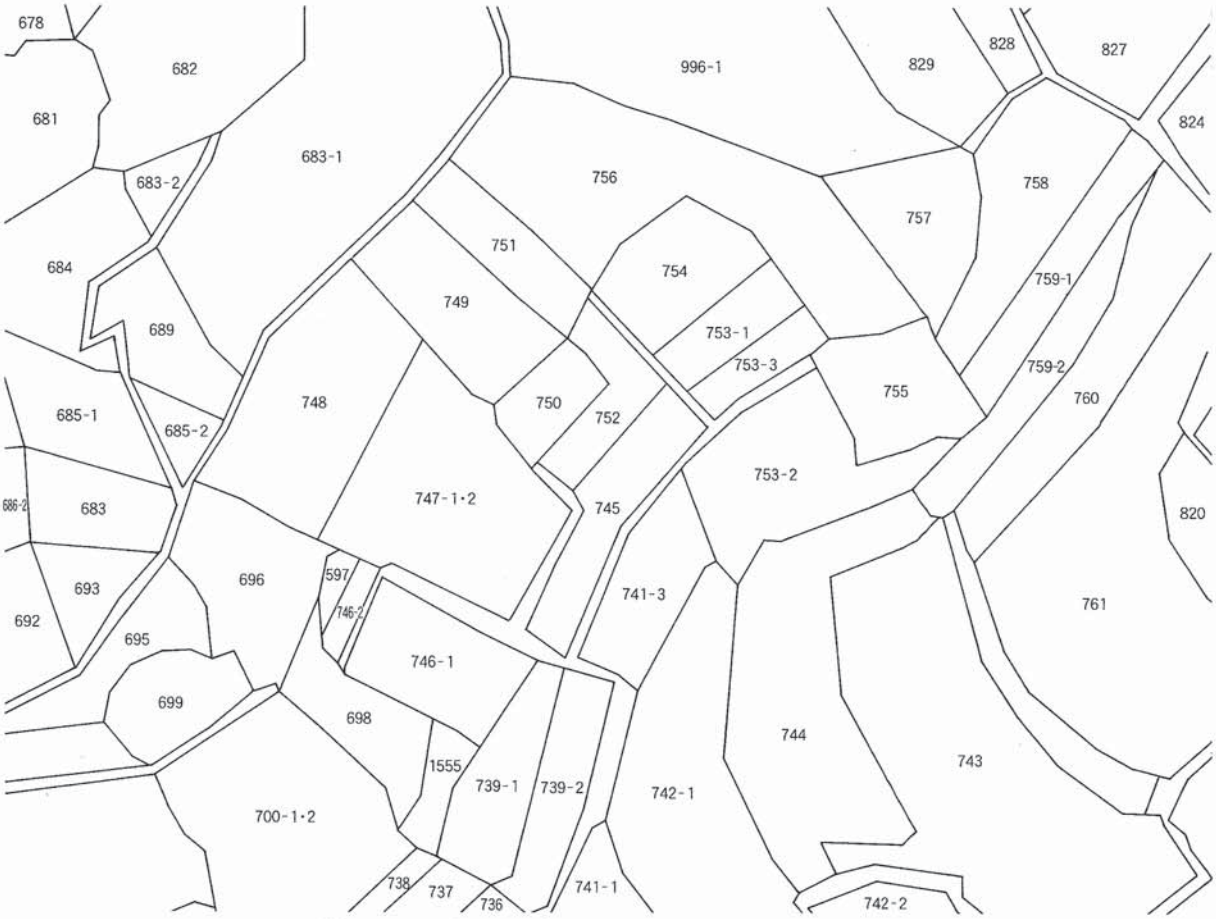
1）古墳の名称については大字と小字名を用いて真弓ワダ古墳と仮称することとする。

【引用・参考文献】

明日香村教育委員会1978　「真弓マルコ山古墳」パンフレット
網干善教他1980　『岩屋山古墳－史跡環境整備事業に伴う事前調査概要－』明日香村
明日香村教育委員会1987　『牽牛子塚古墳－環境整備事業に伴う発掘調査－』
奈良県立橿原考古学研究所1987　『与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書　第56集
明日香村教育委員会2008　「真弓遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報平成18年度』



第９図　真弓ワダ古墳位置図（1：2000）



第10図　真弓ワダ古墳周辺地籍図（1：1000）

第３章　総括

今回は、岩屋山古墳の測量調査報告と真弓ワダ古墳の踏査成果を報告することができた。岩屋山古墳については精美な横穴式石室に魅了され、多くの観光客が訪れる観光地の一つになっている。また考古学の分野では「岩屋山式」の横穴式石室の指標として、学会からも注目をされている。この「岩屋山式」の横穴式石室の年代観については研究者により、７世紀第Ⅰ四半期から第Ⅲ四半期までと隔たりがあり、議論されているところである。これまでこのタイプ横穴式石室で時期を特定できる資料として、平群の西宮古墳の羨門部から出土している飛鳥Ⅱの杯蓋がある。これは古墳築造時のものか、墓前祭祀時のものか意見が別れるところではあるが、当該期の横穴式石室を考える上で重要である。しかし、終末期古墳は全般的に築造時期を示す土器の出土が少なく、型式学的な石室の編年観に頼らざるを得ないのが現状である。近年、飛鳥周辺では高松塚古墳をはじめ、キトラ古墳やカヅマヤマ古墳、牽牛子塚古墳や真弓鑵子塚古墳など新たな後・終末期古墳の調査の事例が増えつつある。飛鳥地域の終末期古墳は律令国家形成期に造営されたものも多く、東アジア的な視点から解明しなければならない課題も多い。そういった中でこれまで調査等で確認されている古墳以外にも我々が知りえない多くの後・終末期古墳が飛鳥の地には存在している可能性が高い。そういった点を考慮して測量調査とは別に踏査も実施している。踏査は飛鳥地域をエリア毎に行っており、その中には後・終末期古墳の可能性があるものも含まれていることから今後随時、報告していく予定である。

飛鳥地域は歴史的風土に育まれた緑豊かな土地柄であるが、遺跡を取り巻く環境は時代の流れとともに、少しずつ変化してきている。昭和40～50年代に盛んに行われた測量調査もこういった時代の流れを見据えたものとして、その成果は現在の飛鳥地域の後・終末期古墳を研究する上で基礎資料となっている。平成10（1998）年から実施している王陵の地域史研究も13年が経過し、少しずつではあるがそのデータは蓄積されつつある。こういった成果は今後、飛鳥地域の後・終末期古墳の研究や古墳の保存対策等を検討する上で基礎資料となれば幸いである。

（西光慎治）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう
書名	王陵の地域史研究
副書名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告V
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編者名	西光慎治編
著者名	西光慎治、辰巳俊輔
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課
所在地	〒634-0141　奈良県高市郡明日香村大字川原91－3番地　TEL 0744-54－5600　FAX 0744-54-5602
発行年月日	西暦2011(平成23)年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
岩屋山古墳	奈良県高市郡明日香村大字越516-2	29402-1	17-A-156	135° 47′ 51″	34° 27′ 57°	201005～201101	学術
真弓ワダ古墳	奈良県高市郡明日香村大字真弓750他	29402-1	－	135° 47′ 13″	34° 27′ 46″	201001～201003	学術

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩屋山古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	—	「岩屋山式」の横穴式石室
真弓ワダ古墳	古墳	飛鳥時代	墳丘背後の切断面	—	—